

委託事業実施内容報告書

平成25年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【地域日本語教育実践プログラム(B)】

受託団体名 地球っ子クラブ2000

1. 事業名称

多文化ハッピープログラム～子どもたちの将来が輝く街を～

2. 事業の目的

多文化の子どもたちが、自分のルーツに誇りと自信を持って日本社会で活躍できるように、彼らを取り巻く教育環境を改善していくための4つの取組をする。親＝家庭、学校、地域(外国人先輩を含む)が子どもたちの問題を理解し、一体となって育てていくために、日本語教育の面の支援だけでなく、日本人社会も変わっていくよう、双方向の取組とする。特に幼児期から学齢期の子育て、教育問題を中心に多文化の子どもたちの学力不振や、就学時の言葉の未発達の問題の改善の糸口を見つける取組でありたい。取り組み1では、子どもたちが学校教育をスムーズに受けられるように。取り組み2では幼児期からの子育てのサポート体制を作ること。取り組み3では、多文化の地域作りに貢献すること。取り組み4では講演会を開き、多文化について、言葉について、コミュニケーションについて、多文化、多世代の人と学び合う。

3. 事業内容の概要

- ①運営委員会…地域の課題の理解、問題意識を共有し、解決のために具体的な方向性を作ること为目标とする。力強く、各機関のつなぎ役を務める。
- ②子育て講座(学齢期)…子どもの教育に親が主体的に関わることが大切である。日本の学校の実情を知り、親の関わり方を学ぶことにより、学校との連絡、また、学校行事への参加ができるようにしていく。
- ③子育て講座(幼児期)…親が自分の文化と子育てに自信を持つことがよりよい子育てにつながる。主として幼児を持つ親が、仲間と学び合い、相談できる仲間を作る就学前の日本語講座。このことにより、スムーズに幼稚園、学校に進める環境作りをする。
- ④外国人と日本人がいっしょに日本語を学ぶ日本語教室。昨年度の委嘱事業の中でほんご畑としてスタート。これを継続、発展させ、地域の多文化発信・地域での貢献の場とし、多文化の街作りに繋げていく。
- ⑤講演会…日本人社会も変わっていきこうというメッセージを発信していく事により、多文化の街作り、仲間作りを進める。

4. 運営委員会の開催について

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題	検討内容
1	平成25年6月4日 14:00～16:00	2時間	コムナーレ9F南ラウンジDテーブル	岩本如貴(代理)小林正美・石川せつえ・八木原利幸(代理)石戸教嗣・久富陽子・高柳ななえ 井上くみ子・芳賀洋子 荻野ゆかり・殿村睦美・金子多実枝・駒野恭子・相内広樹	25年度の委嘱事業プログラムB「多文化ハッピープログラム～子どもたちの将来が輝く街を～」を進めるに当たって	今年度の文化庁事業プログラム(B)「申請計画内容」の趣旨説明 ・具体的な取組1・2・3について。内容とどんな連携ができるか？ ・就学時健診に向けた多文化の親のための教育プログラムの模索、連携のしかた ・具体的な日程の調整(就学時健診の準備のための七里教室・ほんご畑等)
2	平成25年9月24日 15:00～17:00	2時間	さいたま市市民活動サポートセンターFテーブル	岩本如貴・八木原利幸・久富陽子・島崎辰夫 高柳ななえ・井上くみ子 芳賀洋子・荻野ゆかり 金子多実枝・駒野恭子 松澤説子	25年度の委嘱事業プログラムB「多文化ハッピープログラム～子どもたちの将来が輝く街を～」の進捗状況、課題とこれからの連携	今年度の事業の報告……①七里地区で公民館と共催で行った就学前の親を対象とした「勉強会」の成果について②国際フェア、自然体験など、お父さんを巻き込んだ活動について③「ほんご畑」での地域との結びつきについて④講演会前4回の成果⑤来年度の教育委員会との連携事業について⑥10代の子どもたちの現状
3	平成26年2月26日 15:00～17:00	2時間	さいたま市市民活動サポートセンターHテーブル	岩本如貴・島崎辰夫・小林正美(代理)・石戸教じ 張園園+なつみ・高柳ななえ・芳賀洋子・井上くみ子+あいか・金子多実枝・小野寺美樹	25年度の委嘱事業プログラムB「多文化ハッピープログラム～子どもたちの将来が輝く街を～」の課題とこれからの連携に向けた意見交換	今年度の事業の報告……成果と課題について。子どもたちの現状について。来年度に向けてどんな協力ができるかなど意見交換を中心に話し合った。

5. 取組についての報告

○取組1:多文化の街の子育てハッピープログラム(学齢期を中心として)

(1) 体制整備に向けた取組の目標

参加してくる親子が生活している地域との連携を特に密にすることから、生活者としての視点から、必要な日本語、日本語教育について考え直す。

その結果、外国人親子をエンパワメントし、地域に根ざし、社会参加していけることを目標とする。

(2) 取組内容

①防災施設見学と防災日本語講座

さいたま市防災センター防災展示ホールに見学に行き、防災についての知識・それに関する日本語表現を学ぶ。

②就学前日本語講座 公民館との共催事業として。

就学・就学時健診前に日本の学校について語る場を用意し、不安を解消することを目的とする。

また学校教育や子育てについて語ることを通じ、日本語力向上も目指す。

公民館との連携から、近隣の保育園・幼稚園・小学校とのつながりができはじめた。

③自然学習体験と日本語講座

自然学習体験(野外炊飯・オリエンテーリング)の事前講座という位置づけで、「森の贈り物」というテーマで木や木の実、自然に親しみ、その中で日本語を獲得することを目指す。

自然学習体験は10月26日に行う予定だったが台風のため中止。

④食育と日本語・学校と日本語講座

(3) 対象者

外国出身の親と子ども 国際結婚の親と子ども

(4) 参加者の総数 65 人

(出身・国籍別内訳

中国12人、韓国4人、バングラデシュ11人、インド3人、カンボジア1人、パラグアイ2人、ペルー2人、ベトナム6人、スリランカ4人、インドネシア3人、モンゴル2人、

(5) 開催時間数(回数) 20時間 (全 10回)

(6) 取組の具体的な内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	内容	講師等氏名	補助者氏名
1	平成25年 7月13日 13:30-15:30	2時間	植竹公民館	15人	中国(4人) 韓国(2人) インド(2人) バングラデシュ(7人)	防災施設見学 事前講座	防災体験をしたり、防災に関する知識を得、防災に備えたりするためのシリーズ。1回目は防災について既有知識を増やし、防災について考えるきっかけとする。	高柳 なな枝	小野寺 美樹 芳賀 洋子 松澤 説子
2	平成25年 7月27日 13:30-15:30	2時間	さいたま市 防災センター 防災展示ホール	13人	日本(2人) 中国(3人) 韓国(2人) パラグアイ(2人) バングラデシュ(4人)	防災施設見学	シリーズ2回目は市の防災センターに行き、職員の方から教えてもらいながら防災についての知識を得、体験をし、防災に備える。	高柳 なな枝	小野寺 美樹 芳賀 洋子 松澤 説子
3	平成25年 8月10日 13:30-15:30	2時間	植竹公民館	6人	日本(1人) 中国(3人) 韓国(2人)	防災施設見学 事後講座	シリーズ3回目は防災センター見学をまとめ、具体的に震災時のことをイメージすることを目的とする。家族とどこで待ち合わせるのか、避難袋には何を入れておけばいいのかななどをグループに分かれ、考える。	高柳 なな枝	小野寺 美樹 芳賀 洋子
4	平成25年 8月25日 10:00-12:00	2時間	七里公民館	12人	ベトナム(3人) 日本(4人) タイ(2人) 中国(3人)	就学前 日本語講座① 公民館との連携	子どもたちは創作活動。保護者はグループに分かれ話し合い：「学校の用意」「母語」「嫁姑問題」「将来」「学校の行事」について最後は親子一緒に絵本の読み聞かせ(日本語・多言語)	高柳 なな枝	小野寺 美樹 芳賀 洋子 松澤 説子
5	平成25年 8月28日 10:00-12:00	2時間	七里公民館	7人	韓国(3人) タイ(1人) インドネシア(3人) スリランカ(4人)	就学前 日本語講座② 公民館との連携	子どもたちは創作活動。保護者はグループに分かれ話し合い：「相談できる友達がいる?」「料理」「学校」について最後は親子一緒に絵本の読み聞かせ(日本語・多言語)	高柳 なな枝	小野寺 美樹 芳賀 洋子 井上 くみ子
6	平成25年 8月31日 10:00-12:00	2時間	七里公民館	22人	ベトナム(6人) タイ(1人) 日本(6人) 中国(4人) バングラデシュ(3人) モンゴル(2人)	就学前 日本語講座③ 公民館との連携	子どもたちは創作活動。保護者はグループに分かれ話し合い：「学校の用意」「母語」「学校の教科」「通知票」「学校の行事」「PTA」について最後は親子一緒に絵本の読み聞かせ(日本語・多言語)	芳賀 洋子	小野寺 美樹 井上 くみ子 張 園園 田代ドルマー
7	平成25年 9月28日 13:30-15:30	2時間	植竹公民館	9人	中国(3人) 日本(1人) 韓国(2人) ベトナム(3人)	自然学習体験 事前準備	10月26日に行う予定の自然学習体験の事前講座という位置づけ。「森の贈り物」というテーマで木や木の実を使った工作をし、自然に親しみながら日本語を獲得していくことを目指す。	高柳 なな枝 加倉井 範子	小野寺 美樹 芳賀 洋子
8	平成25年 11月23日 13:30-15:30	2時間	植竹公民館	10人	中国(1人) 日本人(1人) 韓国(2人)	自然学習体験	「タネの不思議」自然体験の一環。タネを題材とし、食べられるタネ・食べられないタネなどタネについて考えつつ、季節・自然の力・食について話す。	高柳 なな枝	小野寺 美樹 芳賀 洋子 松澤 説子
9	平成25年 9月14日 13:30-15:30	2時間	植竹公民館	4人	中国(1人) 日本人(1人) 韓国(2人)	食育と日本語 (国の料理文化理解)	・中秋の名月、十五夜をテーマに月の満ち欠けや年中行事の理解をはかる。 ・韓国のトッポギを韓国の保護者から作りを教えてもらう。保護者が国際交流協会から講師として派遣される準備を行いつつ、参加者の食への理解をはかる。	高柳 なな枝	小野寺 美樹 芳賀 洋子
10	平成26年 1月25日 13:30-15:30	2時間	植竹公民館	9人	ペルー(2人) 日本(3人) 中国(1人) 韓国(2人) カンボジア(1人)	食育と日本語 学校と日本語 生き方と日本語	・「ノロウイルス」調理や食事の際に何を注意するべきかについて話し、流行している感染症について対策できるようにする。 ・「学校での悩み」「将来(保護者自身の自分探し)など保護者が学校と何かかわりを持って行くか、また、保護者自身が日本でどう生きていくかについて話す。	高柳 なな枝	小野寺 美樹 松澤 説子

(7) 参加者の募集方法

①防災施設見学と防災日本語講座、③自然学習体験と日本語講座、④食育と日本語・学校と日本語講座は地球っ子クラブ2000に参加している人を基本に講座を開催した。地球っ子クラブ2000への募集は埼玉県国際交流協会のHPやさいたま市国際交流協会のHP、埼玉日本語ネットワークによる日本語教室一覧に記載されている。最近では学事課が相談に来る外国人親子に近隣の日本語教室を紹介してくれるようになってきている。①防災施設見学と防災日本語講座に関してはお知らせを配布し、知り合いなども誘ってもらうように促した。

②就学前日本語講座は公民館との連携で共催事業として行った。今、教室に通って来ていない親子に情報を届けるために、地域の回覧板にも挟まれる「七里公民館だより」や、講座のチラシを作成し地域の幼稚園・保育園に届け、保護者に配布してもらうようお願いした。チラシは日本語だけでなく、ベトナム語・中国語・ベンガル語・スペイン語などで作成した。この多言語化は現在教室に通っている保護者に協力してもらって作成したものである。公民館側で各幼稚園・保育園に外国籍の子どもについて問い合わせし(何人いるか、どこの国か)、チラシを届けに行くと連絡をつけてくれた。

(8) 特徴的な活動風景(2~3回分)

■2013年7月27日(土)さいたま市防災センター防災展示ホール見学

防災の学習の2回目として、地震や火災体験ができる防災センターを、親子で見学した。

1. 防災センターの方からの挨拶

初めはセンターの方が不安に思ったようで、「日本語で話して大丈夫ですか?…と言っても日本語しか話せないんですが。」などと聞いてきた。センターの方は、「避難」などの難しいことばを使用していたが、こちらから「『避難』ってことばではなく、『逃げる』ということばのほうがわかりやすいです」と要望を伝えるなどして、向こうも意識してくれた。慣れてくると「何か国の方がいらっしゃるんですか?」「みなさん、この地域に住んでいる人ですか?」などと、参加親子に声をかけていた。

2. 防災映像シアター

大人用だと、内容が親にとっても子どもにとっても難しい可能性があったため、子ども用の映像を見た。内容は「火の用心」に関するもので、子どもたちは「あ〜火事になっちゃう」「あ〜よかった」と一喜一憂する姿が見られた。

3. 地震体験

2011年の東日本大震災ではさいたま市が震度5強だったこと、阪神大震災では震度7ほどあったことなどの説明があり、震度5から震度7の揺れを体験した。

小学3年生の女の子は「ずっとしゃがんでた! 生まれ〜って言ったけど止まらなかった」。大人でも座って立ち上がろうとしても立ち上がれない経験をし、「大きい揺れが来るってわかっているんだけど、やっぱり怖い」と感想が聞かれた。

4. 煙体験

火事になって煙が充満した部屋を逃げる時の注意事項を説明してもらった。

その後、実際に煙の部屋に入り、出てくる体験をした。中は煙で真っ白で何も見えず、あかないドアもあり、パニックになってしまう様子がみられた。学校で、逃げる時の基本『おかしもち』=おさない「かけなさいしゃべらない、もどらない、ちかよらない

と教えられているが、知識として知っているのと、実際に体験するのでは違うようだった。「『おかしもち』の中でも『しゃべらない』は守れなかった」と学校に通っている子どもは話していた。

5. 消火体験

ピンを抜いて、ホースを構え、ハンドルを握って、映像の火を消すというもので、消火体験は映像の火が消せるか、消せないか、「成功」「失敗」など出てきて、みんな一生懸命、消火活動に取り組んでいた。試してみることはできない消火器を使うことができ、いい経験だった。

6. 防火衣着体験

消防士の服を借りて写真を撮って過ごした。

子どもは来場記念に消防のクリアファイルがもらえた。

<参加者の感想>

・バングラデシュお父さん

「20年日本に住んでいて、こういうところは初めて来ました。来てよかった。先生、防災センターは英語でなんと言いますか? 友達も誘ってきたい。」

・中国お母さん

「体験と言ってもドキドキして、本当の火事だったらどうしよう。」

・韓国お母さん

「東日本大震災の時は娘1人が日本にいたけど、あのぐらい大きい揺れだったんだと初めてわかった。」

・センターの方

「はじめは外国の方でどうしよう、日本語しかできないけど…など心配もあったが、たくさんの方に来てもらえてよかった」

などの感想が聞かれた。

何も無いのが一番いいが、いざという時のために家族でこのような体験しておくのは大切である。



■2013年8月25日 就学前日本語講座①

外国のお父さん お母さんあつまれ！～にほんご教室「にほんの学校について」～

- 1.全体で趣旨説明
- 2.保護者・子どもは別にグループをつくる
- 3.子どもは創作活動、保護者はグループに分かれ「にほんの学校」について話す。
- 4.全体で絵本の読み聞かせ（日本語と多言語）

子どもたちは牛乳パックをつかった工作「いないいないばあ」、小麦粉粘土、パネルシアターでお話作りなどを行った。すぐ近くに保護者もいたので、安心感を持ちながら工作を楽しんでいた。出来上がると見せに行くなど満足感があつたようだ。

保護者は、5つのグループに分かれ、各グループで自己紹介を行い、興味のある項目について話していった。話し合ったテーマは以下の通り。

- ① 自己紹介、「学校の用意」「母語」「嫁姑問題」
- ② 自己紹介、「将来について」「母語」
- ③ 自己紹介、「学校の行事」「将来について」
- ④ 自己紹介、「学校の行事」「将来について」
- ⑤ 自己紹介
- ⑥ 工作、パネルシアターでお話作り

最後に全体で絵本の読み聞かせを行った。

五味太郎『わにさんとぎつ、はいしゃさんとぎつ』の紙芝居を日本語バージョン、日本語・中国語バージョンで読んだ。日本語だけではなく、保護者の母語で読んでいることに対しても興味を持ち、新鮮な気持ちをもつ保護者もいた。



(9) 取組の目標の達成状況・成

①防災施設見学と防災日本語講座

1) 防災に関連する日本語

実際に防災に関する体験をしたことで、防災に関わる言葉も理解しやすく、覚えやすかったようだ。感想からもわかるように、このような施設への見学は外国人親子だけでは企画することはないようなので、教室のみみんなで一緒に行けたのはいい機会だった。

2) 公民館から外に出るチャンス

今回のような公共施設見学をすることで公民館を出る機会を作り、駅での待ち合わせや公共交通機関の利用など日頃行えないことができた。また防災について学ぶこともでき、繰り返し出てくることばに理解を示せるようになった。

また防災に関する3回の学びの結果、4人が公民館の救命講習に参加することができた。日本人向けの講座に外国人住民だけで参加するにはハードルが高いことが多い。日本人も一緒に参加することで、日本人との橋渡しになり、また外国人住民がこの見学をきっかけに、社会に出ていくチャンスや防災・人命救助に関する理解につながった。

3) 日本人側の変化

センターで説明する日本人は、「日本語わかりますか?」「みなさん、このセンターに来るために集まったんですか?」「日頃日本に住んでいらっしゃるんですか?」など、日ごろあまり外国人住民と接することがない様子だったが、徐々に簡単な言葉で話せばいいんだということがわかったようで、普通に、快く対応してくださった。日本人の変化の一步になったのではないだろうか。

②就学前日本語講座は公民館との連携で共催事業として行った。今、教室に通って来ていない親子に情報を届けるために、地域の回覧板にも挟まれる「七里公民館だより」や、講座のチラシを作成し地域の幼稚園・保育園に届け、保護者に配布してもらうようお願いした。チラシは日本語だけでなく、ベトナム語・中国語・ベンガル語・スペイン語などで作成した。この多言語化は現在教室に通っている保護者に協力してもらって作成したものである。公民館側で各幼稚園・保育園に外国籍の子どもについて問い合わせし(何人いるか、どこの国か)、チラシを届けに行くと連絡をつけてくれた。

(10) 改善点について

●学校のこと

を集中的に話すのは、私たちボランティア団体単独の力だけでは限界がある。今後も継続した連携、または行政が取り組んでくれることを望んでいる。私たちの得たノウハウを活用していただき、参加親子から得たメッセージを参考にしたい。

●今後は、就学前に不安を抱えている保護者が多いこと、ニーズがあることを、幼稚園・保育園・学校関係者に理解していただき、積極的に外国出身の保護者に呼びかけてもらえるよう働きかけたい。

●外国人保護者だけが学ぶのではなく、保育園・幼稚園・学校関係者なども現状を知り、課題に対し協働していく姿勢が求められる。今後、教育関係者向けの講座を開ければと考える。取組の内容や実施体制などについて改善すべき点を具体的に記載すること。

○取組2: 子育ての街の子育てハッピープログラム(幼児期)

(1) 体制整備に向けた取組の目標

育児に必要な日本語の習得を目指すことに加えて、地域の中で親子がよりハッピーに成長していけるヒントを日本人も外国人もいっしょに学び合い探していくこと。そのことを通して、子どもがスムーズに学校生活に入っていける道筋を作る。運営委員会等の団体、機関と連携して、多言語絵本の読みかせをより増やし、多文化社会と母語の大切さを社会に定着させる。

(2) 取組内容

幼児教育に関する体験・理論に接する機会、また、子育てを通じた関係作りの中で、互いの文化への理解を深めていく。また、親子が自分のルーツに自信を持って積極的に社会参加できるように準備を進めていく。

①父親も参加しやすい自然体験学習

②母語を使った絵本の読みかせと絵本と手遊び講座(図書館等で)……母語による読み聞かせを取り入れたお話を実施することで出演者(外国人参加者)、参加者(お客さん)の間で互いのルーツ・文化への理解を育む。読み聞かせの体験がもたらす母子(家族)関係の安定について理解を広げる。

③地域の料理講習会への参加、および、日本人向けの料理講習会の講師を務める。

(3) 対象者 日本で子育てをしている外国人とその子ども

(4) 参加者の総数 26人 +子ども19人

(出身・国籍別内訳 中国5人、モンゴル3人、ペルー2人、インドネシア1人、パラグアイ1人、韓国1人、ロシア1人、スリランカ1人、オーストラリア1人、アゼルバイジャン1人、日本9人、子ども19人)

(5) 開催時間数(回数) 20 時間 (全 10 回)

(6) 取組の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	内容	講師等氏名	補助者氏名
1	平成25年 7月1日 10:30- 12:30	2時間	コープブラザ	10人	ペルー(2人) パラグアイ(1人) インドネシア(2人) 中国(4人) モンゴル(1人)	自然学習体験準備	バーベキューの相談、各自持ち物、食べられないもの、持ってきたいもの、持ってきてはいけないものなどを話し合う。(例えば、みんなで遊べるおもちゃはいいがゲームやアイパッドはダメと決定。)防災クイズや防災絵本の紹介、各国の災害と災害対策についても話す。	井上くみ子	小野寺美樹 張園園
2	平成25年 7月15日 11:30- 13:30	2時間	秋ヶ瀬公園	22人	中国(8人) ペルー(3人) モンゴル(2人) 日本(7人) ロシア(2人)	自然学習体験	屋外でBBQ体験。子どもたちは自然にふれ外で元気に遊んで食べる。お父さんの参加しやすい日に設定し、多くのお父さんに来てもらうことができた。外国人妻を持つ日本人男性の交流の場ともなった。	井上くみ子	小野寺美樹 張園園
3	平成25年 8月5日 10:30- 12:30	2時間	コープブラザ	8人	中国(4人) インドネシア(2人) 日本(2人)	おはなし会準備	図書館でのおはなし会の出し物を相談。歌や遊びなど紹介したいものなどを出し合い、皆で決定。その後練習。	井上くみ子+あいか	小野寺美樹
4	平成25年 8月22日 10:00- 12:00	2時間	南浦和図書館	11人	中国(2人) 韓国(2人) 日本(7人)	おはなし会	自国の言葉、歌などの紹介。子どもは母親のいきいきと話す姿を見て、誇らしい気持ちになる。日本人も近い国だからとても似ていること、近い国でも全然違うことを知り、大人も子供も興味深く聞いていた。観客①子ども17名、大人10名②子ども5名、大人6名	井上くみ子+あいか	小野寺美樹 張園園
5	平成25年 9月2日 10:30- 12:30	2時間	コープブラザ	11人	スリランカ(1人) 中国(4人) 日本(6人)	フェア準備	国際フェアにむけて、看板などの作成。どのようにしたら見やすいか、おいしそうか、また自分だったら何を売るか、など話をしながら進める。	井上くみ子+あいか	小野寺美樹
6	平成25年 11月3日 11:30- 13:30	2時間	けやきひろば	11人	ペルー(3人) モンゴル(5人) 日本(3人)	国際フェア	国際フェアに出店し、自国の料理を多くの人に紹介。約600食を紹介できた。	井上くみ子+あいか	小野寺美樹 芳賀洋子
7	平成25年 11月19日 11:00- 13:00	2時間	六辻公民館	8人	韓国(1人) モンゴル(2人) 日本(5人)	韓国料理の紹介	日本人が韓国料理を学ぶ。料理を通して自国のことを紹介。教える立場になる、感謝されることにより自信をもてる活躍の場になった。日本人15名参加	井上くみ子	李 銀美
8	平成25年 12月16日 10:30- 12:30	2時間	コープブラザ	8人	オーストラリア(1人) 中国(2人) インドネシア(3人) 日本(2人)	産前産後日本語勉強会	病院で必要な語彙を勉強するとともに、産前産後の手続き、役所の書類などのチェック。産後必要な物や店などの情報交換。不必要となったものの譲り渡し。外国人経験者は教える立場に。	井上くみ子	小野寺美樹
9	平成26年 1月23日 14:30- 16:30	2時間	南浦和図書館	9人	モンゴル(2人) インドネシア(3人) 中国(2人) 韓国(1人) アゼルバイジャン(1人)	おはなし会	自国の言葉、歌などの紹介。母親が活躍するのを見る機会となる。母親の言語で参加した子もいた。日本人はいろんな国があること、いろんな国の人が住んでいること、初めて聞く言葉など、大変興味深く聞いていた。観客①子ども19名、大人12名②子ども14名、大人9名	井上くみ子	小野寺美樹 芳賀洋子
10	平成26年 2月3日 10:30- 12:30	2時間	コープブラザ	10人	中国(2人) インドネシア(3人) 韓国(1人) 日本(4人)	節分	節分の工作、節分の話や絵本の紹介、神社での豆まきに参加し、行事を通じて地域との交流をはかる。	井上くみ子+あいか	小野寺美樹 芳賀洋子

(7) 参加者の募集方法

さいたま市子育てブックでの紹介。講座参加者へのチラシ配布。

(8) 特徴的な活動風景(2~3回分)

7月15日

自然学習BBQの様子

子どもたちは遊んで食べて汗だく
この日の料理はパパたちにおまかせ
ママたちは食べておしゃべり
男性陣は外国人妻の話題で盛り上がり、女性
陣は日本人夫の話で盛り上がる。



8月22日、1月23日

図書館でのおはなし会の様子

挨拶絵本、わにさんどきっはいしゃさんどきっ、
ぼくのうちはゲル、ほらそっくりなどをいろんな
言語で紹介。
子どもがママの言葉で参加することもありま
す。
日本で子育てをする母親にとっては、大変うれ
しい事です。



(9) 取組の目標の達成状況・成果

参加者の声として出たことを中心に成果をまとめると

①子育てを通じた関係づくり

講座修了後も参加者の多くがそれぞれ地域のお祭り、料理教室等のイベントに連れ立って参加するなど交流の広がりがみられた。

②ルーツ・文化への理解

おはなし会、国際フェアではたくさんの人に自国のことを紹介することができた。参加者は達成感と共に大きな自信を得た様子であった。

また、おはなし会実施後のアンケートでは親子共に異文化に触れる機会として期待を寄せられていることがわかった。

③家庭での育児を省みる機会

参加者は親子連れが中心なので、毎回自然と互いの子育てが話題となった。気軽に話し合える関係の中で育児の疑問、経験を共有することができた。

(10) 改善点について

教室は、普段から参加者が言いたいことをいえる場になっているので、参加者から出てきたやりたいことをもっと積極的にやるべきだと感じるがあった。そこで来年度は、教室活動にもっと積極的に関わってもらうことを考えている。具体的には、教室活動の補助者に先輩格の外国出身者に入ってもらうことを考えている。

また、参加者の中に出産を予定している人が複数いて、やりたいことの中に出産育児に関する学習がある。今年度の講演会講師の久富教授、また、研究への協力から繋がりの出来た看護大学等、専門家を招いてお話を聞く機会を作りたい。

○取組3:“にほんご畑”で日本人も外国人も共に学び合い、地域に貢献しよう！

(1) 体制整備に向けた取組の目標

外国出身者が地域社会で活躍できるようになるためには、当事者が日本語の学習を進めることだけでなく、日本人社会も変わることが必要である。この取り組みでは、すでに日本語を高度に習得した在住外国人と日本人が共に学び、関係づくりをすることによって、地域社会での多文化発信の拠点となることを目標としている。特に学校教育や公共の場でのやさしい日本語の普及をめざしている。

(2) 取組内容

昨年度の文化庁委嘱事業の中で立ち上げた“にほんご畑”(日本人と外国人が共に日本語を学び合う場)を更に発展させ、学習だけでなく、地域社会に日本人と協働して貢献することをめざした。
①地域に発信
1……公民館・チャレンジスクール等の講師と日本語学習会②地域に発信2……外国人向けお誘いパンフ(多言語)作成とやさしい日本語学習会③地域での講座参加(救急救命講座)と日本語学習会。以上の活動のために、市内の公民館、学校地域コーディネーターらと連携し、場を開拓していくと同時に質の高い発信ができるように、にほんご畑の中で学びあった。

(3) 対象者 地域の日本人(特に行政関係や教育関係者の参加を期待する)と外国出身者

(4) 参加者の総数 60 人

(出身・国籍別内訳

香港1人、バングラディッシュ1人、中国7人、インドネシア1人、ロシア1人、パラグアイ1人、ギニア1人、モンゴル2人、ペルー1人、韓国4人、タイ2人、台湾2人、マレーシア1人、アゼルバオジャン1人、日本34人

(5) 開催時間数(回数) 20 時間 (全 10 回)

(6) 取組の具体的内容

回数	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	内容	講師等氏名	補助者氏名
1	平成25年5月29日 10:30~12:30 2時間	にほんご畑(地球っ子クラブ2000事務所)	12人+子ども3人	香港(1人) バングラディッシュ(1人) 中国(1人) インドネシア(1人) ロシア(1人) 日本(7人) 子ども3人	地域日本語教室についてラーニングピラミッドにほんごあれこれ6月13日のチャレンジスクールのプログラムについて。	メリーさん、イリーナさんが講師として地域の学校に行くので、その内容をみんなで検討する。子どもたちと一緒に活動しながら、日本と他の国との違いや同じところを知ってもらうことを目的とする内容。リリーさんから地域日本語教室についての問題提起があり、みんなで討議。学習のしかたによる学習効果の違いについて。	芳賀 洋子	井上 くみ子 リリー チョン
2	平成25年6月13日 14:30~16:30 2時間	さいたま市立向小学校	7人+子ども4人	ロシア(1人) インドネシア(1人) パラグアイ(1人) 中国(3人) モンゴル(1人) 子ども4人	向小チャレンジスクール「外国から来た人とお話しよう!いろいろなことばを楽しもう!」	・いろいろなことばでご挨拶(ロシア語、スペイン語、中国語、インドネシア語)『挨拶絵本』・ロシアの話(イリーナ)・インドネシアの話(メリー)・テーブルごとの交流(4カ国)・挨拶ことば集め	芳賀 洋子 (向小担当者) 持田 島田	張園園 大奈路アリシア 田代 ドルマー
3	平成25年6月20日 10:30~12:30 2時間	にほんご畑(地球っ子クラブ2000事務所)	12人	モンゴル(1人) 中国(1人) ペルー(1人) 中国(1人) パラグアイ(1人) 日本(7人)	「学校のことを話しましょう」多言語チラシ作成 成就学時健診等文化庁の事業に向けた連携について	多言語のチラシ作成作業・問題点の共有(埼玉県家庭教育アドバイザーの仕事内容と外国籍の対象者に対する対応の現状)・それぞれの団体の活動内容を活かして何ができるか?ドルマーさんを中心に学校に行く前の親の気持ち、環境などを話してもらう	松澤 説子	芳賀 洋子 田代ドルマー
4	平成25年7月18日 10:30~12:30 2時間	にほんご畑(地球っ子クラブ2000事務所)	12人+子ども5人	香港(1人) 中国(4人) 韓国(2人) ロシア(1人) 台湾(1人) 日本(3人)	・日本語あれこれ・多文化カフェ開催について 「学校のことを話しましょう」多言語チラシ作成	7月31日の多文化カフェの内容について。地域の日本人に多く参加してもらうためにはどうしたらいいかを考える。また、8月に予定している七里地区での就学前講座のチラシを多言語で作成。	芳賀 洋子	井上 くみ子 リリー チョン
5	平成25年7月31日 13:30~15:30 2時間	馬日香日(地球っ子クラブ2000事務所)	18人+子ども4人	香港(1人) マレーシア(1人) パラグアイ(1人)モンゴル(1人)韓国(2人)インドネシア(1人)中国(1人)日本(10人)子ども4人	多文化カフェ『パラグアイのマテ茶 香港のお茶の時間』	リリーさん、アリシアさんからそれぞれの国のお茶の紹介があり、参加者全員でお茶を楽しむ。地域の日本人の参加を目的としていたがいろんな人に参加して楽しんでもらった。	芳賀 洋子	リリー チョン 大奈路 アリシア

6	平成25年9月19日 10:30～12:30	2時間	にほんご畑(地球っ子クラブ2000事務所)	17人	モンゴル(1人)パラグアイ(1人)香港(1人)韓国(1人)台湾(1人)中国(1人)日本(11人)	文化庁視察(3人)	文化庁から3人の方が視察に見えた。日本人と外国出身者がいっしょに日本語を楽しむ、典型的な『にほんご畑』の活動を見て頂く。外国の人から日本語についての質問を出してもらい、みんなでいっしょに考えあう。その後、みんなでイメージビンゴ(イメージ放出法)を楽しむ。	芳賀 洋子	井上 くみ子 田代 ドルマー
7	2013/10/17 10:30～12:30	2時間	にほんご畑(地球っ子クラブ2000事務所)	14人	韓国(3人)香港(1人)モンゴル(2人)ペルー(1人)日本(6人)	多文化カフェの企画 就学時健診の協力	・福島県本宮氏の日本語教室から3人の方が見えて、見学+参加+交流+意見交換。イメージビンゴ『わにさんどき』の紹介(モンゴル語 韓国語 日本語)をした。 ・30日に予定されている多文化カフェについて、相談。前回同様、多くの日本人に咲かしてもらえるよう、企画を考えた。	松澤 説子	田代 ドルマー
8	2013/10/30 13:30～15:30	2時間	馬日香日(地球っ子クラブ2000事務所)	20人+子ども1人	韓国(1人)香港(2人)マレーシア(1人)パラグアイ(1人)タイ(1人)ギニア(1人)中国(1人)日本(12人)	民族衣装で、多文化交流(タイ、マレーシア、韓国、パラグアイ、香港、中国、ギニア、日本、)	地域の日本人に、できるだけ多く参加してもらうための企画。リリー、リム、アリシア、ウンミが中心となり、準備を進めた。衣装だけでなく、文化の紹介もできた。普段外国の人と接する機会がない日本人参加者も、大変盛り上がった。とりあえず、参加してもらうことに意義があるという点で、大成功。	芳賀 洋子	リリー チョン 大奈路アリシア
9	2013/12/12 10:30～12:30	2時間	にほんご畑(地球っ子クラブ2000事務所)	13人	韓国(3人)モンゴル(1人)中国(1人)ギニア(1人)日本(19人)	地域に発信のひとつ ウンミさんの家庭の大根キムチ	今回も、多くの地域の人に参加して、韓国の文化についても大いに話し合いができた。食文化を通して、交流することは初歩的であるが広めるためには非常に有効だと感じた。	松澤 説子	李 銀美
10	2014/1/25 9:30～11:30	2時間	さいたま市立大谷口小学校	5人+子ども5人	韓国(1人)タイ(1人)ペルー(1人)アゼルバイジャン(1人)モンゴル(1人)	地域で活躍「5つの国の紹介」親子で参加	小学校の子どもたちは5つのグループに分かれ、5つの外国のコーナーを回る形で行った。非常に身近な距離で講師と話ができて、講師、子どもたち、それにチャレンジスクール側も満足だったと思う。講師がそれぞれ自分の子どもを連れての参加だったが、これも意義は大きい。チャレンジスクール側の協力に感謝	芳賀 洋子 (大谷口小学校地域連携コーディネーター)小林智子	

(7) 参加者の募集方法

クチコミ中心。チラシ配布(教育委員会、国際交流協会、幼稚園、生協などの協力)メールマガジン(国際交流協会)。てんきりんの地域活動の繋がりが。

(8) 特徴的な活動風景(2~3回分)

■25年10月30日(水)13:30~15:30 場所:てんきりん

地域に発信の活動。

リリーさん(香港)アリシアさん(パラグアイ)を中心に企画を進めてきた多文化カフェで、地域の日本人に世界の民族衣装と文化を紹介。

参加国は他にタイ、マレーシア、中国、韓国、ギニア、日本。

それぞれの人が生き生きと自分の国の衣装と文化を紹介していった。

普段、外国の人と話す機会がない人にとっては、一度に多くの国の衣装を楽しめて、楽しい交流の機会になった。外国人と当たり前に話ができる日本人が地域に増えること、多文化共生サポーターが増えることをめざしているが、そのいい機会になった。



■26年1月26日(土)9:30~11:30 場所:さいたま市立大谷口小学校

地域に発信の活動。

地元の小学校のチャレンジスクールで、自分たちの国を紹介。参加国は、ペルー、タイ、アゼルバイジャン、韓国、モンゴル。

それぞれの紹介コーナーを設け、子どもたち(28人、1年生~6年生)は5つのグループに分かれてコーナーを回る形式。

小さなグループで回ったため、リラックスしてお話しできて、双方共によかったと思う。

また、それぞれ自分の子どもたちを連れて講師として参加できるように配慮してもらった。自分のママが、小学生に囲まれて楽しそうに語る姿をいっしょに体験できたことは外国につながる自分のルーツを肯定的に捉えるいい機会になったと思う。



(9) 取組の目標の達成状況・成果

①日本人と外国人がいっしょに日本語を学ぶ日本語教室は、非常に楽しい活動ができるようになった。

②地域の小学校のチャレンジスクール講師として、出前講座を実施することができた。

③参加している外国出身者による多言語のお誘いチラシを作製した。①②③を通して、外国出身者が地域の活動に参加し、自国の文化や言葉を発信することができた。また、地域の日本人と接することにより、日本人側の多文化への理解者を増やすことができた。チャレンジスクールへの出前講座では、子どもたちからたくさんの質問を受け、実施後は、学校のコーディネーター及び子どもたちから外国の人とたくさん話せてよかった等の感想を寄せられている。

(10) 改善点について

外国人と日本人が共に学ぶ日本語教室では、日本語のことば遊び(イメージ放法)などを中心にやって来たが、日常、言葉を意識的に使っていない普通の日本人にとっては難しい活動のようだ。今後はもっと多くの日本人に参加してもらうために、外国出身者によるお国紹介、料理紹介など、日本語に偏らないカフェ形式のものを企画して行く必要がある。そのことによって、より多くの地域の人が多文化の町を支えるサポーターになるよう、工夫していきたい。

○取組4:すべての子どもたちが いきいきと学び育つ多文化社会を作るために“かかわる ことは かわること”

(1) 体制整備に向けた取組の目標

外国出身者をごく当たり前の隣人として受け入れ、ともに活動していくための、日本人側の意識付けをする。それを通して、多文化の街作りのサポーターを作っていく。

(2) 取組内容

①久富陽子氏の講演会2回

外国に繋がりのある子どもの言葉の発達をサポートする者(子どもたちを取り巻くすべての人)が、「人にとって言葉とは何か?」という根元的な問題を幼児教育の面から考えてみようという講座。言葉の獲得の過程について。母語の大切さについて。表面的な日本語の問題に隠れてしまいそうな問題について、日本語教育界でなく、幼児教育の専門家から話が聞けたことはよかった。Coconicoに参加している外国出身のママたちが母語で読みきかせをする時間を取り入れて下さり、参加している日本人に大きなアピールになった。

② 春原憲一郎氏の講演会2回。

国際交流／すれ違い から 多文化＜混流＞／チャンプルーへ

地域は、特別な受験教育や言語教育など特化された部分を担うところではなく、日常生活の土台の部分で「雑」なもの。「雑」をキーワードに 今自分が隣人としてできることを考えることが基本姿勢。相手の本当のニーズを知り、その達成のためにできることを共に考えていく。学校とは逆で、相手のやりたいことを第一に、できることを共に考えて行く活動例をグループワークで体験してみた。

(3) 対象者 地域の日本人と外国出身者

(4) 参加者の総数 65 人

(出身・国籍別内訳

中国(3人) モンゴル(1人) ペルー(4人) ホンジュラス(1人) アゼルバイジャン(1人) パラグアイ(1人) 香港(1人)韓国(3人)日本(50人)

(5) 開催時間数(回数) 8 時間 (全 4 回)

(6) 取組の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	内容	講師等氏名	補助者氏名
1	平成25年12月19日(水) 18:00~20:00	2時間	浦和コミュニティセンター	33人	香港(1人)中国(3人)韓国(3人)ペルー(1人)パラグアイ(1人)日本(24人)	ことばの育ち~異なる文化の中でも大切にしたいこと	幼児の言葉の発達と、親や周りの人たちの関わり方について。また、幼児期の言葉が人の成長に大切なものであり、質の高い言葉かけが必要。外国出身者による母語での絵本の読みきかせ。	久富 陽子氏 芳賀洋子	リリー チョン 大奈路 アリシア 張 園園
2	平成26年1月15日(水) 18時30分~20時30分	2時間	浦和コミュニティセンター	30人	韓国(2人) ペルー(1人) モンゴル(1人) 中国(2人)パラグアイ(1人)アゼルバイジャン(1人)日本(22人)	異なる文化~驚きと豊かさ 『クラスメートは外国人』から	ワークショップ「異文化インタビュー」3つの文化を想定したグループに分かれ、それぞれが自分の文化を守りながら他社と挨拶を交わす体験。参加者からは、日豪的に異なる文化の中でクラス外国出身者の気持ちが実感できたという感想が多くあった。外国出身者による母語での絵本の読みきかせ。	久富 陽子氏 芳賀洋子	田代 ドルマー 大奈路 アリシア 李 銀美
3	平成26年2月15日(土) 13時30分~15時30分	2時間	浦和コミュニティセンター	21人	中国(1人)ペルー(1人)日本(19人)	国際交流／擦れ違い から 多文化＜混流＞チャンプルーへ	多文化の町で気持ちの良い関係を作っていくためのコミュニケーションの取り方はどうすればよいか。生活の場は「雑」。区別し命名するのではなく、普段着の生のことばを大切にしよう。	春原憲一郎氏 松澤説子	
4	平成26年3月1日(土)13時30分~15時30分	2時間	武蔵浦和コミュニティセンター	33人	ペルー(4人)、パラグアイ(1人)ホンジュラス(1人)アゼルバイジャン(1人)中国(2人)日本(23人)	多文化＜混流＞の活動と実際	地域の教室で言葉を自覚して使い、やりたいことを一緒にするための実際の活動を体験してみる	春原憲一郎氏 松澤 説子	

チラシはシート「取組み4チラシ」に添付してあります。

(7) 参加者の募集方法

チラシ配布(教育委員会、国際交流協会、幼稚園、生協などの協力)メールマガジン(国際交流協会)。子どもメールに参加者募集の発信。日本語学校関係には、現役の日本語教師が対応。

(8) 特徴的な活動風景(2~3回分)

■講演会『かかわる ことは かわること』第2回目……講師:久富陽子氏

1月15日(水)18:30~20:30 場所:浦和コミュニティーセンター

①ワークショップ・異文化インタビュー

3つのグループに分かれ、それぞれ異なる文化圏のグループとする。それぞれのグループで挨拶の仕方を学びイメージする。そのあと、挨拶を交わしながら交流するが、自分の属するグループのもつ特徴を維持し続けるようにする。文化の違う人との交流に戸惑う体験を通し、日本に居る外国出身者の立場や新庄にも触れることができた。また、外国出身者にとっては、来日当時の自分の追体験となったようで、このワークショップを契機に日頃の思いを語る事ができた。

②『クラスメートは外国人』

本の紹介と、ススめ。著作権の関係で、資料として配ることができなかつたため、みんなで議論することができなかつたのが残念。

③多言語による『絵本の読みかせとことば遊び』

多文化子育ての会Coconicoのメンバーによる。生き生きしたママたちに、みんなが感動、楽しい時間を共有できた。子育てする外国出身のママたちにとって、自分の言葉をどう子どもたちに伝えるかは大きな問題。母語を大切にするためには、周囲の理解が重要である。そのことを参加者に実感してもらえたと思う。図書館でのおはなし会などでのチャンスはあるが、今回の講演会のチャンスは、貴重だったと思う。



■講演会『かかわる ことは かわること』第4回目……講師:春原憲一郎氏

3月1日(土)13:30~15:30 場所:武蔵浦和コミュニティーセンター

①今回のテーマ「混流」と「雑」について

世の中の出来事を氷山にたとえて分析。自分たちが見ているものは氷山の上に出ている部分。大部分を占める水面下を見る力の大切さを学んだ。交流から混流へ。雑で混じり合ったこの社会の全体を認め合うことに多文化共生へのヒントがある。大雪の中であったが、熱く開催。

②ワークショップ「コミュニケーションの取り方演習」

グループに分かれ、次々に出される課題に取り組む中で、コミュニケーションとは?を考へる。「普段意識しないで使っていることばを意識的に使う」訓練。日本人は意識していないため、外国の人の言語能力の柔軟さに気付く場面もあった。①②を通して、私たちの思い込みや、無意識の中に潜む問題が浮き彫りにされた。春原先生の言葉の達人ぶりにも圧倒されるほどで、多くの人には衝撃的なワークショップであったと思う。



(9) 取組の目標の達成状況・成果

①幼児教育の専門家からの言葉の問題についての講座を設定することにより、日本語教育関係者だけでなく、幼児教育や教育関係者も含めた地域のもので連携していく必要があることを確認することができた。外国出身者や子どもたちの言葉の問題は日本語だけを取り出すのではなく、1人の人として全人格を捉えて対応することが必要であるというメッセージが伝えられた。②グループワークをする中で、自分の接し方、話し方を振り返るきっかけになった。相手に伝わる話し方をしているか、相手の話を正しく聞き取っているか、相手の気持ちに沿っているかなど。タスクに取り組む、何とかコミュニケーションをとろうとする中で、学校のように先生として教えるのではなく、多文化の仲間としてのかかわり方(隣人としての自然な関係作りで大切にすること)に気づかされた。

①②の講座を通して、多くの人の参加があり、アンケートからも、日本語に偏りすぎないことの大切さがわかったことがうかがえる。また、外国出身者にとっては、日本人といっしょに講座を受けることの楽しさと満足感が伝わってきた。

アンケートから

- ・抽象的な思考をするときに、言語能力が育っていないと難しいと言うことを知りました(中国出身者)
- ・(絵本の読みかせは)一度に多くの国の言葉の話を聞くことができ、初めて聞く言葉も多かったけど自然と笑顔になりました。もっと、多くの国の人と話してみたいと思いました。(大学生・幼児教育)
- ・母語の考え方について深く考えさせられました。認め合うことはすてきですね。学校の先生みんなに聞いてほしいです(県職員)
- ・ワークショップ(異文化インタビュー)は衝撃でした。身をもって体験することで知ることの大切さを実感しました(地域コーディネーター)
- ・氷山の一角だけを見て、全部を見たと思うことはないか?その下の隠れた部分を見る力が必要だとわかった(日本語ボランティア)
- ・文化を変革していく「混流」の考え方はさまざまなコミュニティーに応用できるものだと感じた(国際結婚・夫)
- ・身近な事で、学習の題材がたくさんあることを知りました。持ち帰って活かしたいです(日本語教師)(日本語ボランティア)

(10) 改善点について

現場の学校関係者の参加を期待したが、開催日程の問題、またはテーマ設定が一般的すぎるなどから、説得に欠けた。現場の先生たちが来やすい時期(夏休みなど)に、対象を絞った講座を開く必要がある。具体的な問題について、どう対応するかとか、どんな悩みを抱えているかという内容を考えていく必要がある。全体として、多文化の町のサポーターを増やしていく講座は、私たちの周りの小さな輪に過ぎない。これからも、この基本姿勢を持って、地道に活動を続けていく必要がある。

6. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的

多文化の子どもたちが、自分のルーツに誇りと自信を持って日本社会で活躍できるように、彼らを取り巻く教育環境を改善していくための取組をする。親＝家庭、学校、地域(外国人先輩を含む)が子どもたちの問題を理解し、一体となって育てていくために、日本語教育の面の支援だけでなく、日本人社会も変わっていくよう、双方向の取組とする。特に幼児期から学齢期の子育て、教育問題を中心に多文化の子どもたちの学力不振や、就学時の言葉の未発達の問題の改善の糸口を見つける取組とする。特に、Bプログラムに移行したことをふまえ、他団体、行政機関との連携に取り組んでいく。

(2) 事業目的の達成状況

- ①就学前の親の学習について……七里地区での親のための学習会は、さいたま市では初めての試みであり、大きな成果があった。公民館との共催事業として行ったことができたことはその中でも大きな成果である。来年度も公民館と協働してさらに進めていくスタートとなった。
- ②母語の問題について……普段の活動の中でも母語の問題は中心に位置づけている。これは、外国出身の親だけの問題ではなく、家族、学校、地域全体の理解が必要な問題である。他言語の読みきかせ、地域への出前講座、前半2回の講演会は、この点を意識したものであり、少しずつ定着しつつあるという手応えを得ている。
- ③地域に発信について……外国の人が地域で子育てをしているということを多くの人が知り、仲間として共に暮らす街作りのために外国出身者が積極的にアピールする機会を作ってきた。多言語おはなし会、にほんご畑での集まりなど、外国の人の魅力をアピールする機会を開拓できた。日本人側の「日本語でいいですね～ホッとしました」という言葉は何回も聞かれた。
- ④日本人社会の理解をひろげることについて……地域に発信！の取組みを通して、地域に住む人たちの中に自然につきあえる人が増えてきたと思う。この活動から、多文化サポーターという言葉(認識)が生まれた。多文化サポーターを育成する活動をひろげていきたい。
- ⑤外国出身者の力を活用することについて……にほんご畑の中で、外国出身者の力を活かした活動が定着しつつある。それから広がって、たの教室活動の中でも外国出身者の力を活かしていくことができるようになった。
- ⑥連携について……全体を通して、公民館、教育委員会、久富先生の大学、地域の学校との連携が進んだ。プログラムBに移行したことが、自分たちの意識も含めて大きな転換の力になった。来年度に向けた話し合いがもたれたことも今後の体制作りへの大きな進展だと捉えている。

(3) 地域における事業の効果、成果

- ①連携について(取組み1他全般)……Bプログラムを意識したことで、今までになく連携が進んだ。今年度は糸口がつかめた段階であるが、来年度に向けて具体的な連携が進みそうである。取組み1の中では、七里公民館との連携、共催による講座「学校のことを話しましょう！」(外国人の親を対象)を実施。これにより、近隣の幼稚園、保育園、小学校と話し合いの機会や、チラシを配るなどの協力を得ることができた。また、取組み3の地域に発信「チャレンジスクールで国の紹介」における学校地域コーディネーターとの協働により、さいたま市の教育研究所との話し合いの機会も生まれた。教育研究所については、来年度教師研修の中で外国人児童を受け持つ教師のための講座を設ける話し合いが進み、地球っ子クラブ2000は外国から来た子どもたちや親との関わり方等についてのノウハウを提供するべく、講座に協力していくことになっている。学校における子どもたちの環境改善につながる体制作りに向けた動きが作れた。
- ②地域に発信(取組み2、3)……図書館での多言語によるおはなし会、チャレンジスクールでのお国紹介等の活動ができたことにより、外国出身者の地域参加が進んだ。また、外国につながる子どもたちが、自分の親の活躍を目の当たりにし、自らのルーツに誇りを持つ経験につながった。
- ③多文化の街作り(取組み3)……にほんご畑の発展形として、多文化カフェ形式の文化紹介の機会を作り、日本人側が外国出身者との付き合いに慣れるようにした。その結果、多文化サポーターが地域に増えていく必要性和方向性を確認できた。これからの地域作りに活かしていくヒントとなった。
- ④多文化に関する研修(取組み4)……久富陽子氏と、春原憲一郎氏を招いて、開いた講演会『かかわる ことは かわること』では4回の講座を通して多くの人の参加を得て、人にとって言葉とは何かという根元的なことについて学ぶことができた。外国人の支援が日本語に偏りすぎないように、日本人側も変わっていくという、アピールになった。このような学びの中で、多文化の街作りという大きな目標が進んだと思う。

(4) 改善点、今後の課題について

i 現状 外国につながる子どもたちが、この街で自分たちの能力を充分に活かして活躍できる教育環境の改善のために活動してきた。この中で、教室活動については、居場所になっている。仲間ができる、活動内容が充実して楽しいなど、成果と方向性が見だせている。しかし、子どもたちの教育環境の改善のためには地域の日本語教室の充実の他に、包括的な取組みが必要である。①子どもたちを受け入れる学校に教師研修がない。②就学前の親に対する入学説明会がない③出産や、子育てをする外国出身者のための環境が整っていない。④10代で来日した子どもの教育の場が保障されていない。⑤外国出身の人に情報を届けるシステムがない。以上のことから考えると、外国に繋がりのある子どもたちの教育環境の改善のための地域の日本語教室の役割は、日本語を教えるだけでなく、地域そのものを多文化共生社会にすすめていく牽引力になる必要があると認識している。さいたま市は、分散型地域であるため、子どもたちの問題は表面化しにくいと感じている。この問題を解決するためには、各機関の連携が必要である。

ii 今後の課題

i で述べた現状を改善していくための具体的な課題を挙げる。①学校の問題……クラスに子どもがいる場合の教師研修がなく、各教師に対応が任されている。日本語指導の対象にならない子どもや、日本生まれの子どもの場合、その子にあった配慮がされない、または、配慮の必要が意識されない事例がある。などの問題をふまえ、さいたま市の教育研究所と連携して教師研修の機会を作る。その中で、率直な教師の悩みなどを共有していきたい②学校に入る前に必要な知識や心構えがないまま、子どもを学校に行かせることになる。地球っ子クラブ2000は、今まで積み重ねてきたノウハウを活かし、隣人としてお互いの文化を尊重しあう中で、日本の学校のことを理解できるようなサポート体制を作る。将来的には、プレスクールが必要である。③出産、子育ての早い段階から日本社会とつながることで、子どもたちの教育がスムーズに進むと考えている。子育てに関して、日本人と同じスタートが切れるよう、地域社会の変化をめざしたい。④10代の後半で来日する子どもが増えている。しかし、教育の側に受け入れ体制がないため、大きな問題である。地球っ子クラブ2000では、普段の教室活動の補足として、10代の勉強部屋を開いてきたが、これを定着し、さらに、教育の大きな問題と捉えるよう、各機関に働きかけていきたい。⑤就学前の親のための学習会を開いても肝心の親に情報が届かず、子育ての場があっても、参加する一歩が踏み出せず。そういう人をなくして、早期に日本社会に踏み出すためには行政や学校の強制力が必要である。私たちは地域の力として、息長く親も含めた繋がりを持つことを得意としているので、強制力のある各機関と連携して、地域社会の多文化化(多文化サポーターを育てることを含む)を進めていく必要がある。

iii 今後の活動予定

- ①教室活動の運営に、外国出身者(当事者)との協働を積極的に進めていく。
- ②10代の子どもの学習サポート。同時に、彼等の学習の機会を保障するための体制整備を進めるよう、関係団体にアピールしていく。
- ③外国出身者の地域参加を進めるために、地域のボランティアに積極的に参加していく。その企画をにほんご畑が中心となって進める。
- ④多文化の街作りのために、多文化サポーターを作っていく。そのためににほんご畑を更に充実し、多文化カフェなどの運営をしていく。
- ⑤子どもたちの豊かな成長のために、自然体験を多く取り入れていく。
- ⑤上記の活動を進めるために、教育関係者、行政、幼児教育関係者等との連携が最も必要であるとの認識で、よい関係作りを心がけていく。
- ⑥将来的には、上記の活動を包括し子どもたちの教育体制の一部を担える団体になることをめざす。

(5) その他参考資料